

11. 肝細胞癌に対する経皮的ラジオ波焼灼療法の治療成績

内科学（消化器）

小池健郎, 小嶋和夫, 玉野正也, 真島雄一, 乾 裕子, 前田光徳, 山岸秀嗣, 鈴木真琴, 室久俊光, 飯島 誠, 米田政志, 菅谷 仁, 平石秀幸

【目的】肝細胞癌（HCC）に対する経皮的ラジオ波焼灼療法（RFA）の治療成績と、その局所再発に寄与する因子について検討した。

【方法】対象はHCCに対してRFAを施行した45例、45結節であった（平均年齢 66.5 ± 10.3 歳, 男性30例, 女性15例）。病因はHBV 4例, HCV 40例, NBNC 1例。RFAは第1例目を除く全例でCool-Tip型ニードルを用いて施行した。治療効果の判定にはRFA後1ヶ月以内にDynamic CTを施行し、腫瘍遺残の有無を確認した。Cox比例ハザードモデルを用いた多変量解析にて、治療後のHCCの局所再発に寄与する因子を検討した。再発率の算出にはKaplan-Meier法を用いた。

【成績】45結節全体の1年, 2年, 3年の局所再発率は, 25.0%, 41.0%, 48.5%であった。効果判定のCTを施行し得なかった2例と, CTにて遺残ありと判定されたが, 何らかの理由により追加治療を施行し得なかった4例は全例に局所再発を認めた。これら6例を除外した1年, 2年, 3年の局所再発率は, 20.5%, 27.5%, 27.5%であった。多変量解析の結果, 年齢, 性差, 腫瘍径, 臨床病期, AFP値はいずれも局所再発に寄与する因子ではなく, PIVKA-II値と効果判定CTでの遺残の有無のみに統計学的な有意差を認めた。なお, 穿刺部皮膚熱傷1例と穿刺ルートへの播種1例と焼灼中の腹痛13例を認めた。

【結論】RFAは治療後のDynamic CTによる効果判定をより厳密に施行することが重要であると考えられた。

12. 胃食道逆流症（GERD）に対する外科的治療の選択

越谷病院小児外科

石丸由紀, 大谷祐之, 山岸純子, 高安 肇, 池田 均

【目的】当科で治療したGERD症例の外科的治療について報告する。

【対象と方法】2000年4月から2002年12月までに当科で経験したGERD症例8例について検討した。

【結果】対象症例の年齢は8ヶ月から22歳, 8例中7例が重症心身障害児であった。7例で腹腔鏡下噴門形成術（Nissen）を, Nissen術後の再発を含む2例でBianchiのesophagogastric dissociationを施行した。周術期の合併症は肺炎, 創感染, 吻合部のminor leakを認めたが, 保存的に軽快した。全例で臨床症状及びQOLの改善が見られた。

【考察】Bianchiの手術は侵襲が大きいが逆流の再発はなく, Nissenの再発例では術式の選択の1つとなりうると考えられた。